

# 精霊流し

作・演出 岡部 耕大

舞台は1980年8月15日の九州肥前松浦。夕暮れ。東京で不倫の末、恋に破れた「女」が死に場所を求めて故郷へ戻ってくる。自殺未遂で収容される古びた旅館が舞台。旅館を営む「おばば」は、終戦の日の8月15日、不義の子を死なせた思い出に生きていく。「女」と「おばば」の間で、それぞれの思いをこめたモノローグすれすれの会話が交わされ、「女」は次第に生きる力を取り戻していく…。

「印象的なセリフ。何度も上演されてしかるべき作品」  
「いい劇だった。意気込みだけのことはあった。」  
「これは生命の賛歌である」  
「セリフに圧倒的な力 まざまざと残る印象」

1980年読売新聞劇評  
1982年毎日新聞劇評  
1992年赤旗新聞投稿  
1994年京都新聞劇評

『精霊流し』は、日本の男とその時代を描くことを得意とする岡部耕大が、小劇場運動が盛んだった1980年に発表した女性二人だけの作品です。すでに初演で「印象的なセリフ。何度も上演されてしかるべき作品」と読売新聞の劇評で絶賛されましたように、その透き徹った夕闇から黄昏の風景をバックに女性二人だけの紡ぎ出すような台詞の数々は演劇評論家衛紀生氏をして「演劇史に残る、とんでも名作です」といわしめた作品です。

台詞が持つイメージの劇世界。本来、「演劇は言葉の芸術であったのだ」と頷かせるに十分な内容です。それは、作・演出の岡部耕大もいうように、火のように激しい女の情念をうちに秘めながらも、淡々と自殺未遂の若い女性に自らの戦争体験と苦い過去を笑いながら語り「それでも生きるのだ」という「おばば」は、この時代に生きていく人達の胸の奥の奥までも迫り、力強く生きるを励まします。日本人は、今こそ人間の時代を取り戻さなければ取り返しのつかないことになるのではないのでしょうか。

演劇は人間と人間との出会いを生みます。小劇場運動が盛んだった最中に、敢えて逆らうように上演されたこの人間ドラマが、「もう一度人間の時代に還れ」とでもいうように、静かに浮上しました。すでに各地で再演が重ねられ絶賛されてきました。今、日本人は静かにではありますが、それでもどこか激しく「人間でありたい」と切望しているのかもしれない。

上演された各地での観客の反応がそれを如実に教えてくれます。ピアノが奏でる童謡のメロディーで幕が開くこの一幕物の夏芝居は、その瞬間から咳払いや物音一つない静かな闇の世界が訪れるのです。「おばば」と「女」の絶妙の会話に笑い泣き、それでもだれもが透き徹った8月15日の夕暮れの風景に身を委ね、そこに誘われるのです。それはそこに戦後の日本人の原風景があるからでしょう。名作といわれる所以です。



阿部 百合子



中村 真知子

# 秋日和

作・演出 岡部 耕大

「秋日和 神の恵みし二人かな」

1969年10月22日。「国際反戦デー」に騒乱罪が適用された日の九州・肥前松浦を舞台に東京の息子を案じ、息子を捨てることを決意する初老夫婦の苦い過去。岡部耕大が淡々と辛辣に描く待望の新作。

現在、家族の崩壊が新聞紙上やマスコミを賑わしている。父親不在がどの少年の事件でもクローズアップされる。しかし、現在を現在のみで語ることにには限界がある。やはり、その原因は過去に遡らなければ究明できないのではないか。このドラマは父親と父親であることを放棄する時代の訪れを描くことで、現在の父権の問題にまで迫りたいと企画された。

ひとつには、敗戦に伴う父権の喪失である。父権の喪失は指針を失った子供を育てたことになりはしないか。激動の時代といわれた1970年前後を描き、敗戦を味わった父親と、その父親に頼りなさをぶつける息子。そして、より強くなる母親の存在。

一地方の1969年の波風も立たない家族を描く事で、今日まで綿々とつながる父権の喪失、父親不在の原因を探るものである。

(総合演劇雑誌 テアトロ 6月号掲載)



山下 清美



加藤 佳男



大掛 俊介



岡崎 友範



渡辺 順

## 募集

○岡部企画 制作部員募集 詳細面談 下記事務所まで履歴書郵送の事

○劇団「空間演技」研究生募集

2001年。小劇場演劇史に創立30年の歴史を誇る劇団「空間演技」が思いも新たに研究生を募集致します。

岡部耕大と劇団員がワークショップで責任を持って指導致します。

年齢/18歳以上 条件/なし(但し、時間を守る人) 委細面談

〒214-0031 神奈川県川崎市多摩区東生田 1-12-7